

平成二十八年夏夏季

全国大学国語国文学会六〇周年記念大会案内・要旨集

(第一一三回大会)

期日 六月四日(土)・五日(日)
会場 青山学院大学青山キャンパス
(渋谷区渋谷四―四―二五)

平成二十八年夏夏季

全国大学国語国文学会 六〇周年記念大会（第一二三回大会）のご案内

○同封の葉書に出欠をご記入の上、五月二十三日（月）までに必ず着くようにご返送ください（ご欠席の場合も必ずご返送をお願いします）。

○六月四日（土）の、昼食代（二、〇〇〇円／委員のみ）、懇親会費（一般・八、〇〇〇円、大学院生・五、〇〇〇円）、レジユメ資料代（一、〇〇〇円）、六月五日（日）の昼食代（一、〇〇〇円）は、同封の郵便振替用紙（口座番号／〇〇一六〇一三一七三〇五五一、口座名称／全国大学国語国文学会六〇周年記念大会）にて五月二十三日（月）までにお振り込みください。

○大会についてのお問い合わせは、左記の大会担当までお願いします。

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷四一四一二五
青山学院大学文学部日本文学科小松（小川）靖彦研究室
Eメール yasuhiko.ogawa122@gmail.com

○出張依頼状が必要な方は、提出先の宛名と送り先を明記の上、左記の当学会事務局へお申し出ください。

〒370-1193 群馬県佐波郡玉村町上之手一三九五一一
群馬県立女子大学文学部国文学科北川研究室内
全国大学国語国文学会事務局
Eメール zenkoku.gpwu2014@gmail.com
FAX 〇五〇一三七三〇一〇〇八六

第一日 平成二十八年六月四日(土) 青山学院大学青山キャンパス(渋谷区渋谷四―四―二五)

東京メトロ銀座線表参道駅・JR東日本等渋谷駅下車

常任委員会・委員会(合同開催)(11時00分～11時45分) 総研ビル(十四号館) 九階 第十六会議室

大会

受付 12時30分～

開会 13時

会場 本多記念国際会議場(十七号館六階)

開会の辞

総合同会／本学会常任委員・奈良大学教授
本学会会長・京都市立芸術大学名誉教授

上野 誠 Makoto Ueno
中西 進 Susumu Nakanishi

会場校挨拶

青山学院大学学長

三木 義一 Yoshikazu Miki

公開シンポジウム(13時15分～17時30分)

テーマ 日本とインド——文明における普遍と固有——

六〇周年記念講演(13時15分～14時15分)

美とホスピタリティ—インド・日本の生き生きとした交流の歴史—

ハーバード大学教授

スガタ・ボース Sugata Bose

Beauty and Hospitality: The History of a Living Communication between India and Japan

*講演は英語(同時通訳付き)

六〇周年記念パネルディスカッション「日本とインドを結ぶ——交流の過去・現在・未来——」(14時35分～17時30分)

パネリスト

日本文化の源流としてのインド—仏教と日本文化—

大東文化大学教授

藏中しのぶ Shinobu Kuranaka

近現代の日印文化交流—タゴールと遠藤周作—

日本女子大学准教授

近藤 光博 Mitsuhiko Kondo

日印交流の未来—言語文化の多様性と普遍性—

東京大学大学院教授

田辺 明生 Akiyo Tanabe

コーディネーター
青山学院大学教授
小川 靖彦 *Yasuhiko Ogawa*
コメンテーター
立教大学教授
竹中 千春 *Chiharu Takenaka*

懇親会 (18時00分～20時00分)

会場 アイビーホール (青山会館) 二階 ミルトス

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷四―四―二五 電話 〇三―三四〇九―八一―

会費 一般 八、〇〇〇円 大学院生 五、〇〇〇円

第二日 六月五日 (日) 受付開始 9時00分 総研ビル (十四号館)

研究発表会 《A会場》

会場 十一階 第十九会議室

午前の部 (9時20分～12時10分)

総合司会／本学会常任委員・大東文化大学教授

藏中しのぶ

The Manyōshū (日本学術振興会『英訳萬葉集』) における翻訳の方法

発表者／青山学院大学大学院生

佐藤 織衣

司会／奈良県立万葉文化館指導研究員

井上さやか

『日本霊異記』と中国仏教説話集

発表者／大東文化大学教授

山口 敦史

司会／同志社女子大学名誉教授

寺川眞知夫

〈休憩〉

中世日本の辺境認識―東方の境界領域「外の浜」をめぐる―

発表者／青山学院大学大学院生

杉山 和也

司会／盛岡大学教授

大石 泰夫

『慕婦絵』の和歌

発表者／東京大学大学院生
司 会／日本大学教授

石井 悠加
藤平 泉

昼食・休憩（12時10分～13時10分）

午後の部（13時10分～15時40分）

総合司会／本学会常任委員・大東文化大学教授

藏中しのぶ

インドの絵本と日本の子ども…《読み聞かせ》記録から…

発表者／目白大学・大妻女子大学非常勤講師
司 会／新潟青陵大学教授

宮地 敏子
原田 留美

昔話の伝播―説話集を通じて天竺から本朝へ

発表者／拓殖大学名誉教授
司 会／慶應義塾大学教授

坂田 貞二
石川 透

〈休憩〉

〈パネル発表〉（14時35分～15時40分）

「平和及び人間性の探求にみる日本文学者とタゴールの貢献」
チェア／ヴィスヴァ・バラティイ大学教授
ギター A・キーニ *Gita A Keeni*
The contribution of Japanese Literateurs and Rabindranath Tagore in creation of peace and inquiry into humanity

タゴールの著作に見られる日本 Japan in Tagore's writings
発表者／ヴィスヴァ・バラティイ大学教授
トポティ・ムケルジー Tapati Mukherjee

野口米次郎とロビンドロナト・タゴール、その詩学と使命 Yonejiro Noguchi and Rabindranath Tagore
発表者／大阪市立大学准教授
堀 まどか Madoka Hori

宮沢賢治とロビン・ドロナト・タゴール—人間性への二人の貢献

Kenji Miyazawa and Rabindranath Tagore: their contribution towards humanity

発表者／ヴィスヴァ・バラテイ大学教授 ギータ A・キーニ Gita A Keeni

研究発表会《B会場》

会場 九階 第十六会議室

午前の部（9時20分～12時10分）

総合司会／本学会常任委員・奈良大学教授

上野 誠

露伴と恋と永遠回帰—「土偶木偶」と「プラクリチ」

発表者／名古屋大学大学院生

藤田 祐史

司会／和洋女子大学名誉教授

木谷喜美枝

一九七〇年代の電話—星新一『声の網』をめぐって—

発表者／名古屋大学大学院生

黒田 翔大

司会／早稲田大学教授

石原 千秋

〈休憩〉

森敦「月山」の本文—草稿と初出本文の比較にみる反復の理論—

発表者／創価大学助教

山本 美紀

司会／東京学芸大学准教授

疋田 雅昭

身体的バリエードへの挑戦—『ピカピカのぎろちよん』論

発表者／早稲田大学大学院生

原 みなと

司会／東京学芸大学准教授

疋田 雅昭

昼食・休憩（12時10分～13時10分）

午後の部（13時10分～14時30分）

総合司会／本学会常任委員・奈良大学教授

上野 誠

三島由紀夫『わが友ヒットラー』ロシア語訳について―「独裁者」の文体―

発表者／早稲田大学大学院生

村上 智子

司会／茨城女子短期大学教授

小林 和子

『蠹集』刊行の俳諧史の意味について―其角の白詩受容に注目して―

発表者／群馬県立女子大学教授

安保 博史

司会／和洋女子大学教授

佐藤 勝明

総会・授賞式《A会場》（15時50分～16時50分）

総会

授賞式〔学会賞／文学・語学賞／研究発表奨励賞〕

閉会の辞

六〇周年記念大会実行委員長／本学会常任委員／青山学院大学教授 小川 靖彦 *Yasuhiko Ogawa*

平成二十八年度夏季

全国大学国語国文学会六〇周年記念大会（第一二三回大会）公開シンポジウム

日本とインド——文明における普遍と固有——

日本文化に多大な影響を与えたインド文明。しかし、インドは近代以前の日本人にとっては「天竺」と呼ばれる、見たこともない幻の国であった。それでありながら、インドは日本人の精神世界に大きな足跡を残したのである。現在、日本人はインドを旅して直接にその世界に触れ、その先進性と古代的混沌に驚きを覚えている。多様な社会と文化を抱え込んだインドとの交流は、今後の日本にとってますます重要となるに相違ない。そして、マハートマー・ガンディーの平等主義、*Pacifism*（平和主義）、ラビーンドラナート・タゴールの東西文明融合の思想などを生み出したインドは、未来の世界文明を考える大きな鍵となるであろう。なお、本年は、タゴールが初来日した一九一六年から百年になる。

基調講演

美とホスピタリティーインド・日本の生き生きとした交流の歴史――

ハーバード大学教授

スガタ・ボース *Sugata Bose*

パネルディスカッション

「日本とインドを結ぶ——交流の過去・現在・未来——」

パネリスト

日本文化の源流としてのインド——仏教と日本文化——

大東文化大学教授

藏中しのぶ *Shinobu Kurumaka*

近現代の日印文化交流——タゴールと遠藤周作——

日本女子大学准教授

近藤 光博 *Mitsuhiko Kondo*

日印交流の未来——言語文化の多様性と普遍性——

東京大学大学院教授

田辺 明生 *Akio Tanabe*

コーディネーター

青山学院大学教授

小川 靖彦 *Yasuhiko Ogawa*

コメントイター

立教大学教授

竹中 千春 *Chiharu Takenaka*

平成二十八年夏季

全国大学国語国文学会 六〇周年記念大会

研究発表会

【研究発表会／A会場 午前】

The Manyōshū (『英訳萬葉集』) における翻訳の方法

青山学院大学大学院生 佐藤 織衣

The Manyōshū (『英訳萬葉集』) は、一九四〇年に出版された日本学術振興会による『萬葉集』の英訳本である。学術振興会は、昭和九(一九三四)年より小委員会において、日本の文化を海外に宣揚する目的をもって日本の古典作品の翻訳に着手した。特別委員会や小委員会は工学研究や化学研究を主としており、文学研究はこの第十七小委員会のみであった。そこで翻訳されたのが『萬葉集』であった。これは『萬葉集』が、日本文化の淵源を示すものであるとの意識からである。これと同時に日本人による萬葉歌の英訳がいくつか発行されているが、どれも英文学者によって翻訳されたものであり、学術振興会の小委員会のように佐佐木など国文学者や歌人が中心となって英訳がされるというのは異例のことであった。第十七小委員会では、翻訳委員会、原案委員会と担当を別れての作業がされていたが、そのどちらにも関わって

いる人物が佐佐木信綱であった。佐々木はかねてより日本の歌を世界文学ととらえ、歌の英訳を作ることを望んでおり、この小委員会でも中心となっていたと考えられる。

英訳されたものを見てみると、国文学者や歌人らが英訳に関わっていることもあり、当時の萬葉歌の評釈を英訳でも再現しようとしていることがわかる。しかし、当時の歌の解釈がもとなっていて、読むことは読み取れるものの、英訳されたものがそれらの評釈とずれてしまっているものもある。英訳することで、日本固有の言葉で歌を表すことはできないうえに、異なる言語に置き換えることで、歌は違う姿を見せるため、翻訳者の意図と異なる歌意が生じることもあり得るのである。戦前、萬葉歌は戦意昂揚教材として国語教科書に採録されていたが、英訳によって示された萬葉像は教材のものほど軍国主義的でも、超国家主義的でもなくなり、戦後に第二版が出版されてもそのままの形で残されたのである。

『日本靈異記』と中国仏教説話集

大東文化大学教授 山口 敦史

弘仁年間成立の『日本靈異記』は、上巻序文で、「冥報記」と「般若験記」の書名が挙げられている。このことは、この二書を先蹤として『日本靈異記』が作成されたことを推測させる。「冥報記」は唐臨撰述の『冥報記』、「般若験記」は孟献忠撰述の『金剛般若経集験記』のことだとされている。『日本靈異記』にこれら中国作成の仏教説話集の影響があるとすれば、それは序文

における理念、説話集としての構成、説話内容などに渡る可能性がある。

『冥報記』は、(あくまで現行のものについてであるが)序文と上巻十一話・中巻十九話・下巻二十四話、計五十四話からなる。『冥報記』は、全体の主題においては〈善悪の応報の真実〉を主張することであり、上巻が「高德の僧・仏法守護者」、中巻が「信心による善報」、下巻が「反仏法者の悪報」の説話とされる(三田明弘『冥報記』と作者唐臨について)、説話研究会編『冥報記の研究』第一巻)。『冥報記』は説話の主要登場人物の性格・属性で話の順列を形成していると思われる。

これに対し、『金剛般若経集験記』は(大日本統蔵経本では)、序文と救護篇(十九章)・延寿篇(十二章)・滅罪篇(三章)・神力篇(十六章)・功德篇(十章)・誠応篇(十章)、合計七十章とからなる。さらに、各六つの章にはそれぞれ序が付いている。いわば、類従的構成がなされていると言えよう。冒頭の序文では(般若の教えの偉大さ)が主張されており、その主旨に沿って般若の教えを体現する靈験譚をまとめた、としている。説話内容としては、すべての説話が『金剛般若経』の力により苦難を脱したり、奇跡を起こしたりする話になっている。

本発表では、『冥報記』『金剛般若経集験記』両書の特徴を考究しつつ、『日本靈異記』に及ぼした影響の大きさについて論ずる。

中世日本の辺境認識

—東方の境界領域「外の浜」をめぐる—

青山学院大学大学院生 杉山 和也

中世日本に於いて、日本の東西の最果ての土地として広く認識されていたのは、東の「外が浜・夷島」、西の「鬼界島・硫黄島」であったと、大石直正(「外が浜・夷千島考」関晃教授還暦記念会編『関晃先生還暦記念 日本古代史研究』吉川弘文館、一九八〇年)は指摘している。また、これらは流刑地、ないし悪鬼追放の場の総称でもあり、こうした境界領域の住人の描写に関しては非農耕、多毛、異風俗、異言語といった要素が東西で共通していることも指摘する。村井章介(『アジアのなかの中世日本』校倉書房、一九八八年)は、大石直正の論を更に一般化。中世の国家観念は「中心—周縁」的な基本構造を持ち、そこに「浄土—穢」という要素が組み込まれ、中心は清浄な空間で、周縁たる境界領域は汚穢に満ちているとした。中世の境界領域に関して、歴史学の分野では主に以上の論を基礎として研究が蓄積され続けている。しかし、発表者としては、大石直正の「外の浜」をめぐる論で論拠とされていた民俗学的成果や、近世の資料の取り扱い方について疑問がある。そこで本発表では、近年の東北地方の考古学的成果も踏まえつつ、日本の東の最果てたる「外の浜」がどのような認識で捉えられ、また文学作品に如何に表現されてきたかについて、通史的に概観し、再検討を試みたい。

『慕婦絵』の和歌

東京大学大学院生 石井 悠加

『慕婦絵』（全十巻・西本願寺蔵）は、観応二年（一三五一）に八十二歳で示寂した本願寺三世覚如の生涯を描いた伝記絵巻である。

本絵巻の成立には、本文中に名が挙がる覚如の次子従覚（撰述）と高弟の乗専（発企）のほか、長子存覚が関与した可能性も指摘されている。それだけでなく、二十代から晩年にかけて、曾祖父親鸞の行状を描いた親鸞伝絵を繰り返して制作し、また親鸞の師としての法然を『拾遺古徳伝絵』に描いた覚如であるから、制作には生前に自ら関与していた可能性も十分に考えられる。示寂の翌年には、『慕婦絵』とは別に覚如の伝記絵巻『最須敬重絵詞』（乗専撰述、詞書のみ伝存）も作られている。親鸞廟堂を守る覚如の姿が「親鸞伝絵」には描かれ、覚如の手で制作される親鸞伝絵が『慕婦絵』に描き込まれる。覚如は制作者、登場人物双方の立場から、複数の真宗絵巻の創出に携わった人物なのである。

その中でも『慕婦絵』巻五以降は、覚如が日野氏の系譜上に生まれ、様々な歌人達と交流し、私撰集『閑窓集』を伏見院の叡覧に入れたことを描いている。覚如が歌僧として優れた技量を持っていたことが、絵と詠歌を駆使して描かれており、主人公の家集という性格が他に比して顕著である。本発表は『慕婦絵』のこの特徴の理由について注目した。

まず『慕婦絵』所収歌の内容と状況を検討し、覚如と僧俗の人々との交流を記録するそれらの詠歌が、当時どのような意味を持って所収されたものであったのか、諸史料と照合しながら整理する。

次に、『慕婦絵』と他の絵巻の主人公の詠歌行為を比較して、『慕婦絵』が覚如制作の絵巻に連なる作品としては位置づけられず、また覚如詠の所収意図も『最須敬重絵詞』と異なっている点を確認する。『慕婦絵』が覚如の文芸活動を絵巻に織り込むことで、超常性を帯びさせずにその顕彰を果たし得た事実を明らかにしたい。

【研究発表会／A会場 午後】

インドの絵本と日本の子ども…『読み聞かせ』記録から…

目白大学・大妻女子大学非常勤講師 宮地 敏子

絵本は絵画と言葉からなる芸術だが、その歴史は定義により大きく異なる。コメニウスの『世界図絵』を絵本の嚆矢とする説もあれば、太古に洞窟の中に描かれた絵を絵本のルーツと見る場合もある。

インドでは世界最古の児童文学「パンチャタントラ」や二大叙事詩「ラーマヤナ」や「マハーバーラタ」を描いた絵図を携え村々をめぐり、物語を語る文化が最近まで息づいていた。日本でも絵巻物は奈良時代に遡り、仏教を絵解きで布教したのは平安時代からだ。

現在では、世界中と言えるほど、絵本は普及してきている。対象年齢の枠も外し芸術表現の一つとして絵本制作をしたり、対話研修や心理療法に活用したり、多言語の国ではリテラシー向上のために配布したりと、それぞれの社会で絵本は実に多様に用いら

れている。

I Tの発展で日本の子どもが接する情報は一見非常に多いようだが、そこにはかなりの偏りがみられる。翻訳絵本の多くは欧米のもので、それ以外の地域の作品は、意識的に大人が伝えないと子どもが自分から手にすることは少ない。

「朝の読書運動」の一環で近隣の小学校が実施している《読み聞かせ》活動に7年前から参加している。幼少期の多文化共生に関心のある私は、週一回、世界地図を黒板に広げ、選書した国の昔話絵本や、その国生まれの絵本を読む。インドも積極的に伝える国の一つだ。子どもたちは「違い」を発見して驚き、「同じ」に共感して親しみを覚えるようだ。『パンチャタントラ』『ランパン』『たまごからうま』『十にんのきこり』『一つぶのおこめ』『トラのじゅうたんになりたかったトラ』『サンタルのもりのおおきなき』『たびにでたファルガさん』などの読み聞かせ記録から日印文化交流の芽を考察する。

昔話の伝播―説話集を通じて天竺から本朝へ

拓殖大学名誉教授 坂田 貞二

紀元前五世紀ころに北インドでおきた仏教は、東アジアの諸地域を経て紀元六世紀ころに日本に伝来した。仏陀の前身譚集『ジャータカ』をふくむ漢訳の仏教経典も日本にもたらされた。枠組みは仏陀の前身譚ながら、『ジャータカ』はそれが編まれたころに民間で語られていた話を取りこんだらしい。そういうインドの民間

の話は、その後もインド各地で語られてきた。また『ジャータカ』をはじめとする説話集は、その後のインドの語りを伝承し磨きあげることに寄与したであろう。

日本に漢訳で伝わった『ジャータカ』は、日本の説話集『今昔物語集』の形成に大いに寄与した。そしてインド起源で仏典に取り入れられた話のいくつかは、日本で広まり、日本の人たちにとつてそれらが「自分のもの」となった。

この発表では、インド起源と思われる五話を取りあげ、まず、いまの北インドで語られている話と前四世紀ころに編まれた説話集『ジャータカ』のつながりを探る。つぎに、それに類似する日本のいまの話と『今昔物語集』の挿話のつながりを確かめる。併せて『今昔物語集』とインドの『ジャータカ』のつながりにも留意する。

この発表で取りあげる五話のうち一話について、論の進めかたを略述しておく。

インドの「鰐と猿」は、古くは『ジャータカ』の「鰐と猿」として記録され、今日ではヒンディー語の方言研究書に語りの例として「鰐と猿」が記録されている。

日本の類話「猿の生き胆」は、古くは『今昔物語集』の「亀、猿のために謀らるる語」として残り、いまの語り「猿の生き胆」は、竜宮城のお姫さまが病気なので猿の生き胆を亀にとらせにやるが——という話である。

この話でインドの主人公「鰐」は、日本で「亀」になっている。昔話の同化の例だ。

〈パネル発表〉

「平和及び人間性の探求にみる日本文学者とタゴールの貢献」

チエア／ヴィスヴァ・バラテイ大学教授 ギータA・キーニ

インドと日本は「仏教」を介して非常に長くにわたって精神的に深い関係を培ってきた。近代に入ると一九〇二年、この日印関係は、岡倉天心（覚三）とロビンドロナト・タゴールという二人の東洋人の出会いによって、知性に裏打ちされた学問の形を取って、新しい芽を吹いたといえよう。天心による東洋の芸術・文化に対する再評価への真摯な提言は、日本とインド全土とりわけベンガル地方を互いに密接な関係へと近付けた。

ノーベル文学賞受賞後のタゴールの日本訪問は、当時の日本人らにタゴールの哲学を広く知らせるきっかけとなった。そこからタゴールと日本の文学者達との知的交流が始まっていったが、そのなかでも特に有名なのは、一九三〇年代後半にタゴールと野口米次郎との間で交わされた戦争に関する応酬であろう。世界を舞台に活躍した日印の二詩人の使命と詩学とは、今日、どのように再評価出来るのか。

また、タゴールと宮沢賢治については、これまで直接討議の議題にのぼる事はなかったかと思われるが、ここで、彼等のような詩人たちの見解や人生観が、人類や世界全体に対してどのように響き合うのかについて探る事は、いま、大きな意義があることと思われる。

タゴールと日本文学者たちの「人間」の生き方に関する哲学、そして社会あるいは世界全体に対するたゆまない取り組みや貢献が、今回のパネル討議の焦点になるだろう。

タゴールの著作に見られる日本

ヴィスヴァ・バラテイ大学教授 トポテイ・ムケルジー

はるか遠い昔の時代から、インドと日本は相互に深い結びつきを發展させてきたことが知られている。その長きに亘る関係は、二〇世紀初頭、岡倉天心（覚三）とロビンドロナト・タゴールという二人の東洋の偉人たちの歴史的な出会い（一九〇二年）によって、更なる生命力が吹き込まれたと言ってよい。

この歴史的遭遇の重要性がどれほどのものであったかについては、タゴールの東京講演（一九一六）の中に窺い知る事が出来る。講演でタゴールは次のように語っている。「私はこの集まりにおいて喜んで皆さんに告白申し上げる。それは、ベンガルにおける精神の覚醒の役割に繋がる大きな影響の一つは、あの偉大な岡倉の心から流れ出たものであることを。そのことにより、われわれの現代史の最も実り多い時期のひとつが日本と結び付いていたという事に、私は特に感謝を申し上げたい」と。

今回の発表では、タゴールの日本の印象をとりあげ、その賞賛——日本が西欧的産業化と東洋的精神主義の豊かな結合を成し遂げ、更には東洋の尊厳を守り抜くだろうとの確信を述べた——気持ちを引き出し、再検討する事に注意を傾けてみたい。

野口米次郎とロビンドロナト・タゴール、その詩学と使命

大阪市立大学准教授 堀 まどか

野口米次郎のインドとの複雑な関係は、一方には、タゴールやサロジニ・ナイドウをはじめとする多くのインド知識人らとの直接的な交流があり、他方には、イギリスやアイルランドの文化人ら東洋へのまなざしを受けて形成された面もある。彼らのような国際的評価をうけたアジアの詩人たちは、東洋の詩学や文化の国際的再評価を牽引し、また脱植民地の思想や民族主義の思想のブラッグシッフ的役割を担う存在になっていく。野口米次郎とタゴールの日中戦争をめぐる国際的な政治論争は従来よく知られてきたが、それは二人の関係のごく一部分に過ぎない。野口は、タゴールの日本訪問する以前より交友関係を持ち、生涯にわたりタゴールの人道主義と警告について深く理解していた一人であった。本発表では、主に彼らの詩学と国際的使命という観点を中心に話したい。

宮沢賢治とロビンドロナト・タゴール―人間性への二人の貢献

ヴィスヴァ・バラティ大学教授 ギータ A. キーニ

インドと日本における卓越した二人の文学者ロビンドロナト・タゴールと宮沢賢治は、両者とも裕福な家庭に育ち、豊かで平穏な生活を送る為のふさわしい教育を受けた。しかしながら、二人

の慈悲深い心は文学的才能を育む一方で、人類への奉仕の為に自らの生涯を捧げる道を選んだ。ロビンドロナトは八〇歳の長寿を生き抜き、一九一三年にはノーベル文学賞を受賞、世界の注目を浴びる。一方、賢治は不幸にも三七歳の短命に終わり、彼の存命中にはその作品はあまり多くの読者の手に届く事がなかったのであった。いずれにしても興味深いことには、二人の生涯と人生哲学に対する理解の仕方について、多くの共通点が見出される。

この発表では、両人の生涯で重要となる宗教からの影響、困窮に喘ぐ人々への絶えることのない気遣い、全人教育への比類のない考え方、そして人類の発展に対する見解と活動を論じることになる。また、賢治とタゴールによる、それぞれの地域（ローカル）と地球規模（グローバル）の貢献が、どのように人々の心の中にどのように生き続けているのかについても、焦点を当てたい。

【研究発表会／B会場 午前】

露伴と恋と永遠回帰―「土偶木偶」と「ブラクリチ」

名古屋大学大学院生 藤田 祐史

永遠回帰の思想に出会った人はどうなるのか。幸田露伴は、この思想にいかに対峙したのか。この発表は露伴の「土偶木偶」と「ブラクリチ」という二篇の小説の精読を通して、前述の問いに答えると共に、対象とする小説について新しい読解を提示することを目的にする。

幸田露伴には「春の夜語り」という歴史小説があり、彼はそこで日本とインド、それぞれの「恋」を歴史上の例を挙げて比較している。私の発表の対象である二作品も、前者は日本を、後者はインドを舞台にしているが、分析の方法としては両者の比較分析ではなく、双方に共通する「永遠回帰」と「恋」という主題に注目し、露伴がそれぞれの小説において生じる問題に、どのような解決を与えているか検証する。具体的には、まず「土偶木偶」に先んじて彼が「永遠回帰」の問題と向き合った長編「天うつ浪」を紹介し、結局中断に終わったこの小説が抱えていた問題が、後の露伴文学においてどのように扱われてきたのか、概観を示す。例えば、状況の回帰する小説「幻談」、ことばの回帰する小説「望樹記」がそれに当たる。「土偶木偶」と「プラクリチ」は、人間回帰（輪廻）の小説としては先行論で既に読まれてきたが、「永遠回帰」の思想と関連づけての読解や、双方に共通する「恋」に注目して分析されることはなかった。この発表では、露伴と永遠回帰の思想の対峙の枠組みのなかで、この小説を読み込み、なぜ恋がそれぞれの小説における問題解決につながるのか、考察する。

結論としては、回帰的時間からの解脱として、仏教が説く知性に頼る（主知主義）のでもなく、ニーチェや九鬼周造が説く意志に頼る（主意主義）のでもなく、情を重んじる露伴の立場が反映していることを明らかにする。また、それも個人の立場のみでなく、相手ありきの恋を書いた露伴の態度を問いに対する答えとして是非を求めたい。

一九七〇年代の電話―星新一『声の網』をめぐる―

名古屋大学大学院生 黒田 翔大

星新一『声の網』は、一九六九年から一九七〇年にかけて『リクルート』に連載されたSF作品である。『声の網』に描かれている社会では、銀行や病院といった様々なサービスがコンピュータによって行われている。そのため、必然的にコンピュータに非常に多量の情報が蓄積されていくことになり、その情報を利用してコンピュータは人々を支配していくようになる。その際にコンピュータによって道具として用いられている電話に本発表では注目をする。

作品は電話が非常に発達した未来社会を舞台としており、電話を通して買い物や医療診断などが家に居ながらできるという現代におけるインターネット社会を想起させるようなものとなっている。作品が発表された一九七〇年頃の日本の電話技術は世界の水準へと到達しつつあり、その中でプッシュホン、家庭用電話、自動ダイヤルといったものの普及が拡大していくように社会における電話の位置付けが変容する時期であった。作中の登場人物たちは、日常生活において電話社会の利便性を享受しており、電話が必要不可欠な道具となっている。しかし、そのメカニズムに関しての人々の知識は非常に乏しい。電話に対して人々が無批判的に信頼してしまっている姿を伺うことができるのである。

一九七〇年代の電話に関する従来の研究では、電話によって生じる距離感や空間といった事柄に対する言及が多い。しかし、電話の普及やサービスの向上といった変化自体に対して人々は単に受動的あるいはその利便性を享受する姿勢のみであったのだろう

か。そこで本発表では、『声の網』において電話の利便性の向上に伴って電話を流れる情報が増大すること自体の問題性が描かれていることに言及する。それによって、利便性が向上していく一九七〇年代の電話に対して『声の網』が妥当性のある問題提起をし得ていることを明らかにする。

森敦「月山」の本文―草稿と初出本文の比較にみる反復の理論―

創価大学助教 山本 美紀

森敦「月山」の草稿が、平成26年3月『森敦「月山」総合的研究』（研究代表者…國學院大學井上明芳准教授、平成25年度科学研究費基盤研究C 森家所蔵森敦自筆資料による基礎的研究）で全面的に公開された。興味をひくのは、電車の中で執筆したとされているわら半紙に書かれた草稿だろう。森は出勤途中に記したこの草稿を清書し、「月山」を仕上げていったとされる。初出の「月山」本文とわら半紙草稿を比較してみると、重なる部分が多く、先の話を裏付けることができた。

わら半紙の中には、切り貼りによって成る草稿もある。裏表のどちらの面にも記述をし、その片面の一部を採用するために、必要な箇所のみ切り取って貼り付けてあるため、採用されなかった面の文章は切れ切れになっている。しかし、その採用されなかったであろうはずの面の言葉を翻刻し、初出本文と比べてみると、類似する文言があることに気がついた。草稿の段階で棄てられたはずの言葉が、作品として形になる段階で再び記されたのである。

これは二つのことを示している。一つは初出の「月山」本文の遅延性である。初出本文は当該草稿が草稿として位置付けられることによって本文となり得た。それは、初出本文は二度目の記されたことと言いうことを可能にするものである。それに伴ってもう一つは、初出本文はつねに当該草稿を不在というかたちで抱え込んでいるということである。草稿と初出本文を比べることによって、初出本文の言葉がすでに書かれた言葉として初出本文に取り込まれているということが把握できる。初出本文と草稿本文の言葉は、類似する言葉でありながら、別の文脈で書かれた言葉である。そしてこれは、森敦が芥川賞受賞の言葉で用いた「反復」であると捉えることができる。

本発表では、実際に翻刻した草稿本文と初出板の「月山」本文を比較した上で、本文の「反復」について私見を提示したい。

身体的バリエードへの挑戦―『ピカピカのぎろちゃん』論

早稲田大学大学院生 原 みなと

佐野美津男（一九三二―一九八七）は寡作の児童文学作家である。現象学的な問題意識をもちつづけた彼は、「子ども」がもつ「原体験」としての「心情」を重視するスタンスを表明しつつ、児童文学におけるアンチ・リアリズムを主張した評論群でも知られている。しかし、彼の執筆した童話作品において、実際に試みられている表現の方法やその意義については、これまで具体的な考察はほとんどなされてこなかった。本発表においては、一九六

【研究発表会／B会場 午後】

八年にあかね書房から出版された『ピカピカのぎろちよん』を中心とする佐野の童話のテキスト分析を通して、その表現の試みの一端を明らかにするとともに、彼が「非日常的なアクチュアリティの記録」と呼んだ童話表現の可能性を考察する。

―「独裁者」の文体―

早稲田大学大学院生 村上 智子

『ピカピカのぎろちよん』の物語は、世の中を騒がせているが、その実態は不明の「ピロピロ」のために層状にバリケードがつくられた町を舞台として、子どもである「アタイ」の想像と推理、そして不可視のものへの興味に駆り立てられる冒険を軸としている。「ぎろちよん」とは、子どもたちによって作られた、食用野菜を切る玩具の名である。そのモデルとなるのは、バリケードの向こう側に置かれたとされる「ギロチン」の姿である。通行止めをめぐる物語の上に、主人公の身を包む制度的な閉鎖性としての〈此岸〉と、身の開放性を介して想像的に作り出される原初的カオスとしての〈彼岸〉という対立的なイメージが喚起されている。自己疎外を空間的な疎外に仮託する表現をもつことをふまえてこの物語を眺めた時、そこに浮かび上がるのは、逆説に陥る人間としての「アタイ」の姿である。本発表では、そうした人間に対する皮肉と賛美とが混在した語り手のあり方を、このテキストの持つ批評性として考察する。

三島由紀夫『わが友ヒットラー』ロシア語訳について

『わが友ヒットラー』ロシア語訳は、グリゴリーイ・チハルチシヴィリによって翻訳され、一九九三年に出版されている。チハルチシヴィリは日本文学研究者であり、三島由紀夫の作品が発禁扱いだった時代からひそかに彼の作品の翻訳を行い、ペレストロイカ期に翻訳したものを世に発表するようになった。三島由紀夫の作品が発禁とされた理由として、「楯の会」や、自衛隊駐屯地における割腹自殺などによって三島がファシストであるとみなされたことが挙げられる。『わが友ヒットラー』も、ソ連の敵であるヒットラーを友と呼んだ作家として三島を紹介するための道具として使われていた。チハルチシヴィリが旧ソ連で初めて公に発表した三島の翻訳は『憂国』であり、「ファシスト」というそれまでの三島像を連想させるようなものをあえて手がけている。このような翻訳の姿勢から戦略性を読み取ることができる。

『わが友ヒットラー』翻訳テキストにおいて、人称代名詞が効果的に使われていることがすでに先行研究によって指摘されている。ヒットラーとレーム同志の会話のみに親しい者や目下の者に使う二人称が使われ、二人の関係性がより前景化されている。また、ヒットラーの演説部分では、三島のテキストの表現を訳出しながらも、より短文化された簡潔な表現になっている。そしてより実際の演説らしい押韻なども使われている。このような表現の

置き換えによって、文章の美的効果が抑制され、演説の意味内容そのものが前景化されると考えられる。特にロシアにおいては、翻訳テキストの演説の文体は社会主義のアジテーション演説を想起させるものとなりうる。

本発表では、翻訳テキストにおいてヒットラーの会話や演説にどのような文体が使われているのに着目することで、三島の描いた「独裁者像」がローカル化されロシアの読者に届けられている過程を明らかにすることを試みる。

『蠹集』刊行の俳諧史の意味について

— 其角の白詩受容に注目して —

群馬県立女子大学教授 安保 博史

貞享元年、芭蕉が名古屋の地で『冬の日』尾張五歌仙を興行した年、其角は、「二月十五日上京発足」と前書した出立吟の「西行の死出路を旅のはじめ哉」(『五元集』)詠を残して上京、三月、京の涼及・湖春と三吟一歌仙を興行、六月、西鶴矢数俳諧二万三千五百句独吟興行の後見役を務め、七月、信徳・只丸・虚中・千春らと五吟五歌仙及び八吟世吉一卷の興行を行い、九月、江戸への帰途に就いた。其角は、京都俳壇の信徳グループと一座した連句を一集に纏め、『蠹集』の名を付し、紗綾形地巻龍紋の奇抜な表紙を施して刊行、西上行脚の置土産とした。『蠹集』という書名は、八吟世吉一卷の友静の「句を干して世間の蠹を払ひけり」の発句に拠るものと考えられるが、「世間の蠹を払」わんとする

意欲的言辞とは裏腹に、その俳風は、縁語・掛詞的修辭、抜け、寓言など、機知滑稽の旧風の「蠹」が残ったものである。それもあって、『蠹集』の注釈的研究は寥寥として等閑視されている。しかし、『蠹集』は、其角の白居易受容の視点から、その俳諧史的意味を再評価できるのではないか。見落とされがちなことだが、『蠹集』は、千春の「蠹集序」(原漢文)に「白香山ガ諷諭体ヲ倣フナリ」とある通り、各歌仙の発句が、「白香山」すなわち白居易の「諷諭体」に倣って、「疾^{メリ}貧人^ヲ」(貧人ヲ疾^ヤメリ) 晋其角、「耐^{エタリ}閨怨^ニ」(閨怨ニ耐^{エタリ}) 僧只丸、「和^ス社樹^ニ」(社樹ニ和^ス) 伊信徳、「戒^ム懈^ルコトヲ」(学ヲ懈ルコトヲ戒ム) 櫟虚中、「憫^{シム}亡秦^ヲ」(亡秦ヲ憫^{シム}) 望千春」というように、大意が指定されて詠まれ、歌仙興行が展開するのである。この新奇の趣向が、白居易の「酒功ノ讚」(『白香山集』卷六十一)の故事を踏まえて、『誹諧七百五十韻』の巻尾から『俳諧次韻』の冒頭の付合に繋げていく趣向と照応していることを指摘し、白居易文学が延宝期から貞享期の其角俳諧の重要な発想の淵源となっていることを確認した上で、貞享元年に刊行された『蠹集』の俳諧史の意味を問い直してみたい。

